福岡市埋蔵文化財調査報告書第1519集

HARA

原 遺 跡 24

— 第38次調査報告 —

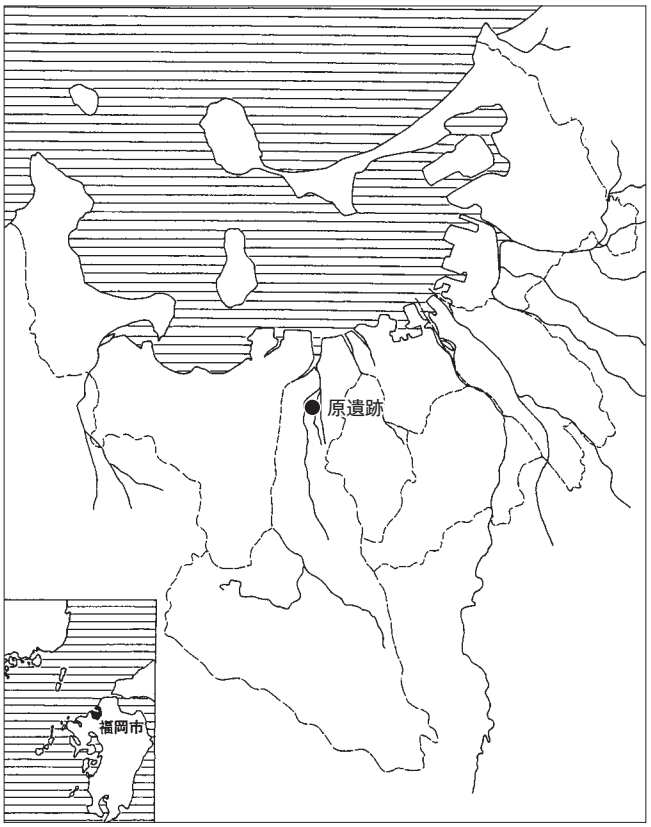
２０２４
福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1519集

HARA

原 遺 跡 24

― 第38次調査報告 ―



遺跡略号　HAA－38

調査番号　2132

２０２４

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面する港湾都市福岡は、太古から大陸との交流の窓口として栄え、それを示す多数の埋蔵文化財が残っています。しかしこれらの埋蔵文化財は開発の進展に伴って、その一部が失われつつあるのも事実です。福岡市では工事に先立って発掘調査を実施し、後世にその成果と意義を伝えるべく、努めて参りました。

本書は共同住宅建設に伴い、早良区原８丁目地内で実施した原遺跡第38次調査の成果を収めるものです。

今回の調査では、弥生時代後期の土坑、中世の溝などを検出しました。

本書を通じて調査成果がより多くの方に共有され、活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、調査委託者様をはじめとする関係者の方々にはご理解と多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

令和６年３月22日

福岡市教育委員会

教育長　石橋 正信

例　言

１．本書は共同住宅建設に伴い、福岡市早良区原８丁目地内において実施した原遺跡第38次調査の報告である。

２．検出遺構はピットとそれ以外のものとに分け、それぞれ通し番号とし、以下の略号を付した。
　ピット　ＳＰ　　溝　ＳＤ　　土坑　ＳＫ

３．遺構の実測は木下博文が行った。

４．遺物の実測は山崎龍雄が行った。

５．遺構・遺物の写真撮影は木下博文が行った。

６．製図は山崎賀代子が行った。

７．本書で使用した方位は磁北で、真北より６°20′西偏する。

８．本書に関わる図面・写真・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。

９．本書の執筆・編集は木下博文が行った。

調査番号　２１３２	遺跡略号　ＨＡＡ－38	分布地図番号　０８２　原
所在地　早良区原８丁目1162－１・２・３		調査面積　396.6㎡
調査期間　2021.10.18 ～ 2021.12.1		

本 文 目 次

第１章　はじめに …… 1
　１　調査に至る経緯 …… 1
　２　調査体制 …… 1
第２章　遺跡の立地と環境 …… 1
第３章　調査の記録 …… 4
　１　調査の概要 …… 4
　２　遺構と遺物 …… 4
　　溝 …… 4
　　土坑 …… 8
　　ピット出土遺物 …… 11
　３　まとめ …… 12
図版１～７ …… 13～19

挿 図 目 次

図１　遺跡の位置（Ｓ＝１／25000） …… 2
図２　調査地点位置図１（Ｓ＝１／6000） …… 2
図３　調査地点位置図２（Ｓ＝１／2000） …… 3
図４　調査区位置図（Ｓ＝１／500） …… 3
図５　調査区平面図（Ｓ＝１／150） …… 5
図６　ＳＤ01・12実測図（Ｓ＝１／80） …… 6
図７　ＳＤ02・04・05実測図（Ｓ＝１／80） …… 7
図８　溝出土遺物実測図（Ｓ＝１／３） …… 7
図９　ＳＫ03実測図（Ｓ＝１／40） …… 8
図10　ＳＫ03上層出土遺物実測図（Ｓ＝１／３） …… 9
図11　ＳＫ03下層出土遺物実測図（Ｓ＝１／３） …… 10
図12　ピット出土遺物実測図（Ｓ＝１／３） …… 11

図 版 目 次

図版１　１区全景（北西から）　ＳＤ01（南から）
図版２　ＳＤ02・04（東から）　ＳＤ05（南西から）
図版３　ＳＫ03上層遺物出土状況（南東から）　ＳＫ03上層遺物出土状況近景（南から）
図版４　ＳＫ03（南西から）　ＳＫ03最下層遺物出土状況近景（西から）
図版５　２区全景（東から）　ＳＤ12（南西から）
図版６　出土遺物１
図版７　出土遺物２

第１章　はじめに

１　調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、令和３（2021）年４月22日付で、株式会社ミートイン・ハイマートより早良区８丁目1162－１・２・３地内における埋蔵文化財の有無について照会を受けた（事前審査番号2021-2-69）。同地内は原遺跡の範囲内であることから、同年７月27日に確認調査を実施し、地表面下70～80cmで遺構を確認した。

今回共同住宅建設が計画されており、その基礎工事内容は残存遺構への影響を及ぼすものであることから、発掘調査を実施することとなった。

本調査は、令和３（2021）年10月18日にバックホウによる表土剥ぎより着手した。10月19日より人力による掘り下げを開始、順次遺構の検出・精査・実測を進め、令和３（2021）年12月１日に終了した。

２　調査体制

調査委託　株式会社ミートイン・ハイマート

調査主体　福岡市教育委員会

（発掘調査　令和３年度　　資料整理　令和５年度）

調査総括	経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課長	菅波　正人（令和３・５年度）
	同課調査第１係長	本田　浩二郎（令和３・５年度）
庶務	文化財活用課管理調整係	内藤　愛（令和３・５年度）
事前審査	埋蔵文化財課事前審査係長	田上　勇一郎（令和３・５年度）
	同課事前審査係主任文化財主事	森本　幹彦（令和３年度）
		板倉　有大（令和５年度）
	同課事前審査係	三浦　悠葵（令和３年度）
		神　啓崇（令和５年度）
		大森　真衣子（令和５年度）
調査担当	埋蔵文化財課調査第１係	木下　博文

第２章　遺跡の立地と環境

原遺跡は、早良平野の中央、金屑川右岸の標高５～６ｍの微高地上に立地する。

遺跡の周囲には、金屑川を挟んだ西側の台地上に有田遺跡群が立地し、弥生時代中期～後期の竪穴建物・井戸、古墳、古代の官衙とみられる掘立柱建物群など、弥生時代～中世までの遺構が濃密に検出される。対する東側の飯倉丘陵には飯倉遺跡が立地し、青銅製武器を副葬する弥生時代の甕棺墓が確認されている。南側の外環状線付近には、次郎丸高石・免・野芥などの各遺跡が分布し、古い時期のものとしては旧石器や初期水田農耕に関わる弥生時代前期の遺物を含む例がある。

遺跡は大きく東西２つの南北方向の微高地上に展開し、今回の調査地点は西側の微高地上、遺跡全

図１　遺跡の位置（Ｓ＝１／25000）

図２　調査地点位置図１（Ｓ＝１／6000）

図３　調査地点位置図２（Ｓ＝１／2000）

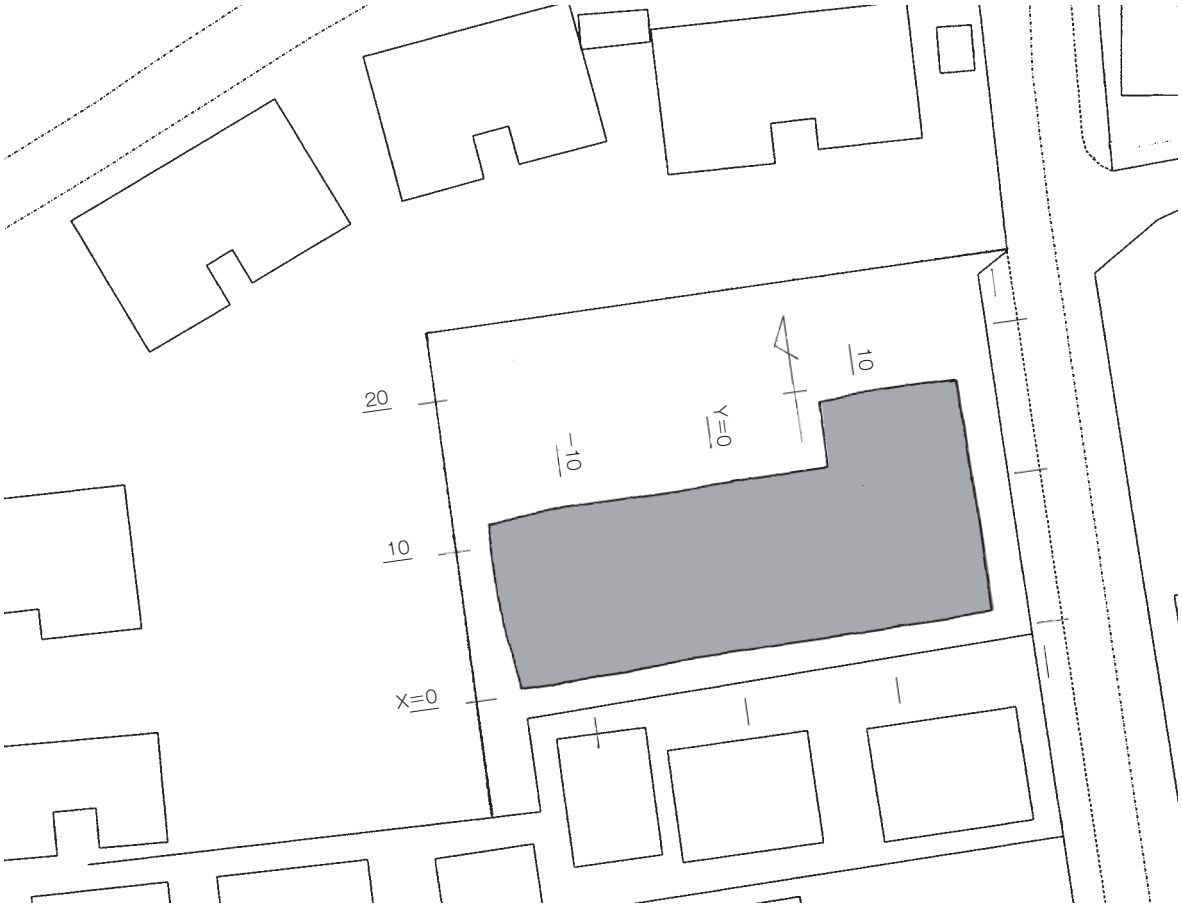


図４　調査区位置図（Ｓ＝１／500）

体の南西端に位置する。

過去の調査は本調査地点より北側で９次をはじめ各調査が実施されている。直近の９次・22次調査では中世後期の大溝が確認され、方形の居館域を成すことが判明している。27次調査では方形の居館域の北東角が検出され、ある時期に居館域が拡大されていることが明らかとなった。また文献史料から名主金丸氏の屋敷跡と推定された。

９次調査では他に弥生時代後期前半および古墳時代前期の溝から、溝祭祀を示す状況で土器群が出土している。

９次　『原遺跡２』福岡市埋蔵文化財調査報告書第140集　1986
22次　『原遺跡11』福岡市埋蔵文化財調査報告書第818集　2004
25次　『原遺跡13』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1129集　2011
27次　『原遺跡15』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1168集　2012
35次　『原遺跡21』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1400集　2020

第３章　調査の記録

１　調査の概要

本調査地点は、遺跡の南西端に位置し、中世後期の居館を囲む大溝を検出した９次・22次調査地点の南側隣接地に当たる。現地表面の標高は6.5～6.7mである。排土処理のため、調査対象範囲を東西に２分割して調査した。東半を１区、西半を２区とし、１区より開始した。

遺構は現地表面下70～80cmの地山である黄褐色シルト層上面で検出した。標高5.8～5.9mである。中世の溝・弥生時代後期前半の土坑・ピットである。出土遺物は土坑から弥生時代後期前半の完形の壺・甕、溝から12世紀の同安窯系青磁椀など、コンテナ６箱分である。

遺構はピットとそれ以外に分け、それぞれ通し番号とした。

２　遺構と遺物

溝

ＳＤ01（図６、図版１）

１区東端、調査区東壁際で検出した。検出長13.7m、幅1.7m、深さ0.3mの南北方向である。

出土遺物（図８）

１は瓦器椀の底部で復元高台径5.8cm、灰オリーブ色を呈す。２・３は弥生土器。２は壺または鉢の底部で復元底径11.2cm。３は高杯の脚部。いずれもにぶい黄橙色を呈す。

ＳＤ02・12（図６・７、図版２・５）

ＳＤ02は１区北端、ＳＤ12は２区北端で検出した。東西方向で、それぞれに遺構番号を付したが、走向から同一の溝とみられる。幅0.45～0.7m、深さ0.1～0.2mで、総検出長29.5mである。東端でＳＤ01に合流する。ＳＤ02・12とＳＤ01の覆土は共通し、明瞭な切り合いは認められない。出土遺物は細片が多いが、ＳＤ12で同安窯系青磁椀の底部片が出土していることから、12世紀、平安時代末期とみられる。

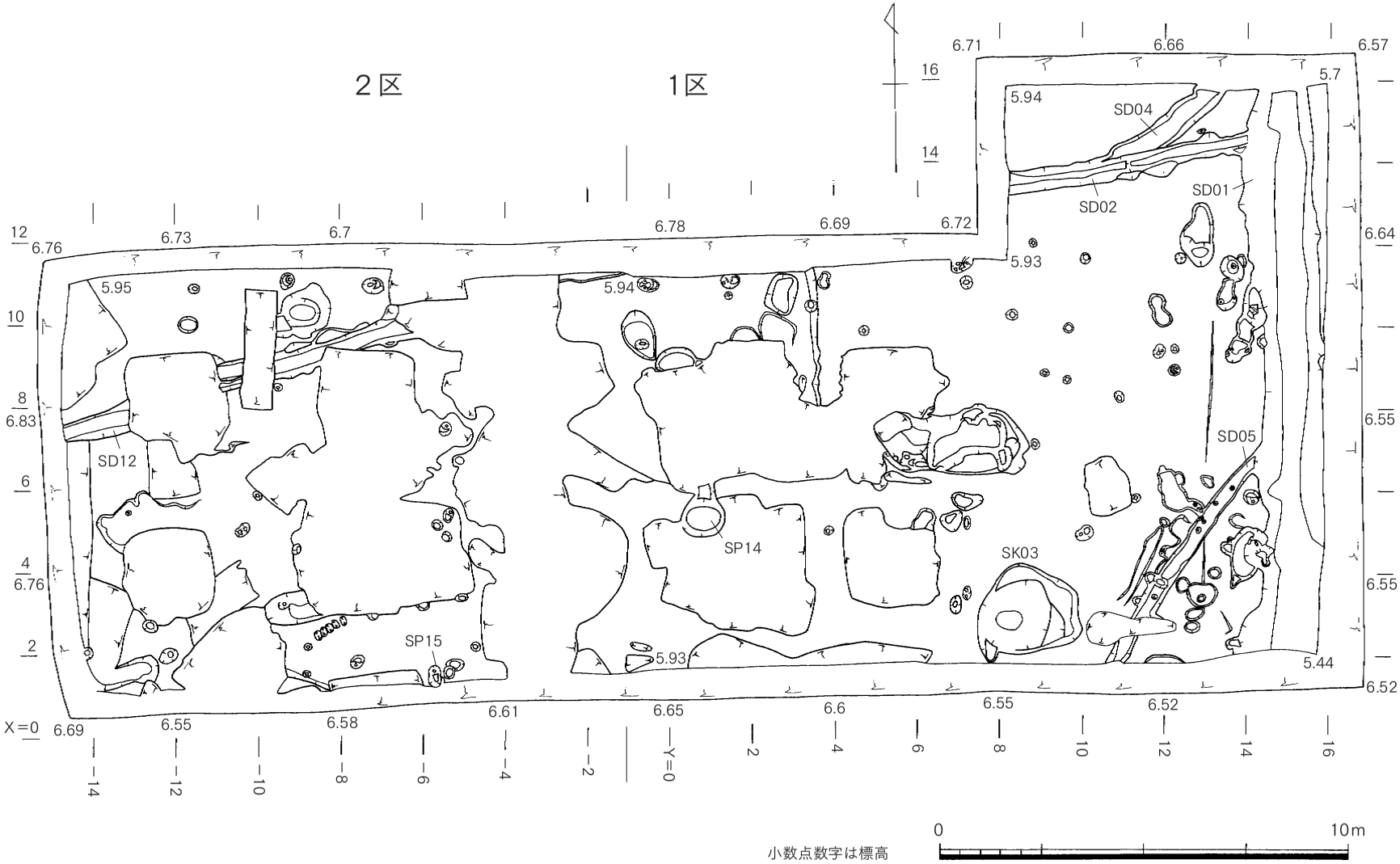


図５　調査区平面図（Ｓ＝１／150）

図６　ＳＤ01・12実測図（Ｓ＝１／80）

出土遺物（図８、図版６）

４・５は土師器皿。底部の調整は回転糸切りで、５は板目が残る。６は白磁椀の口縁部。７は中国産同安窯系青磁椀。高台部を除く体部内外面に灰オリーブ色の釉をかけ、櫛描文を施す。底部内面に重ね焼きに伴う釉の輪状掻き取り痕がある。

ＳＤ04（図７、図版２）

１区北端で検出した。検出長2.8m、幅0.65m、深さ４～11cm、走向は南西から北東で、ＳＤ02に

切られる。

出土遺物（図８）

８は弥生土器の底部片で灰褐色を呈す。

ＳＤ05（図７、図版２）

１区南半で検出した。検出長6.6m、幅0.4m、深さ５cm、走向は南西から北東で、東端でＳＤ01

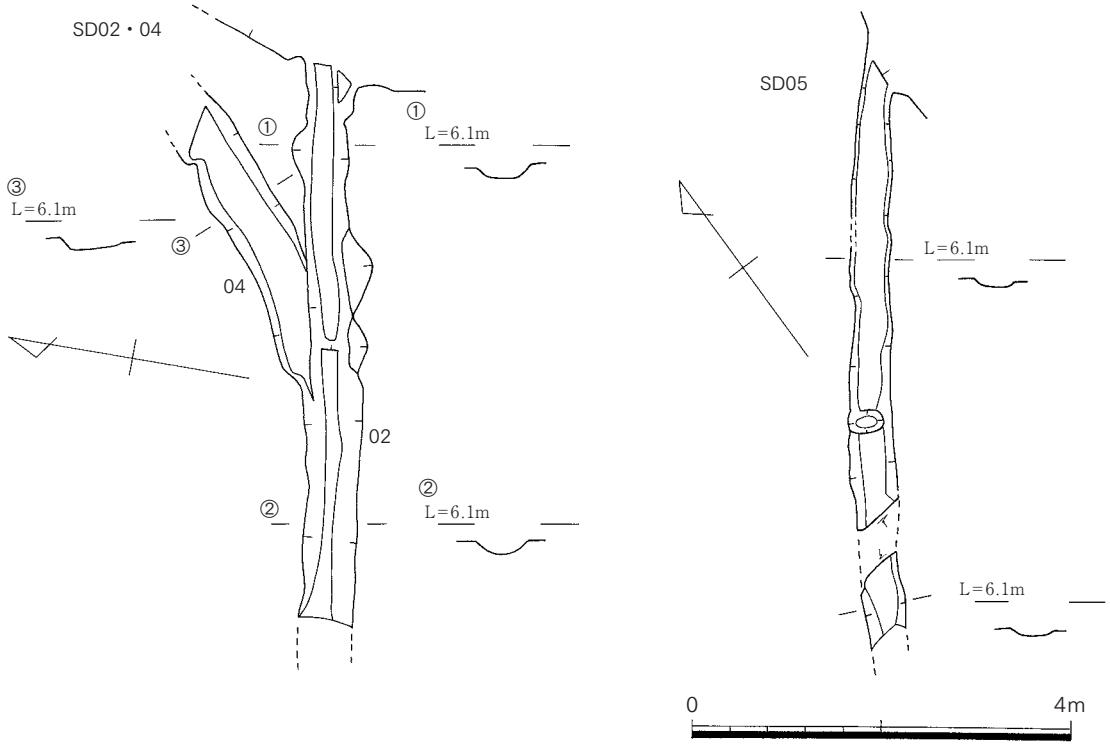


図７　ＳＤ02・04・05実測図（Ｓ＝１／80）

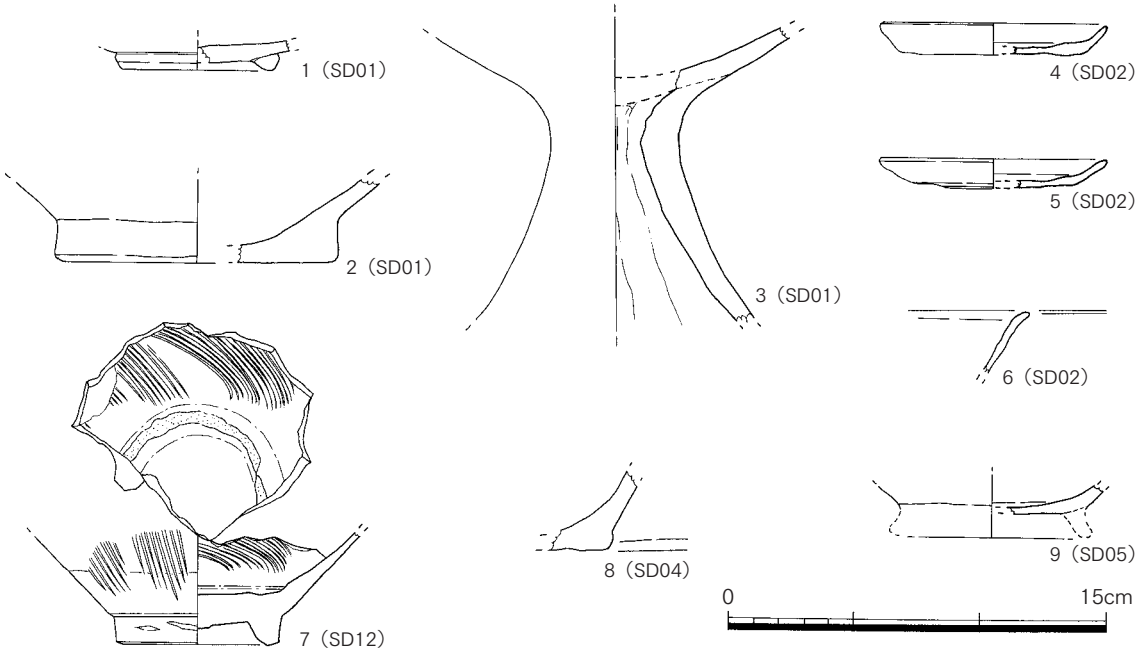


図８　溝出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

に合流する。

出土遺物（図８）

９は土師器椀の底部片。高台は貼り付けで径7.4cm、内面は褐灰色を呈し、丁寧なミガキを施しており、黒色土器Ａ類か。

土坑

ＳＫ03（図９、図版３・４）

１区中央、調査区南壁際で検出した。2.45×2.2mの不整円形で、深さ1.0mである。上層で甕、底部で複合口縁壺の完形品が出土している。出土している壺の口縁部形態から弥生時代後期初頭とみられる。遺物の出土状況から当初井戸の可能性を考えたが、その痕跡が明瞭でないことから、土坑とした。

出土遺物（図10・11、図版６・７）

10～22は弥生土器。10・17は甕・壺の底部。10は残存高8.6cm、底径7.6cmで明赤褐色を呈す。17は底径８cm、橙色を呈し、わずかに赤色顔料が残るか。11は鉢。復元口径18.4cm、器高9.9cm。体部外面下半に粗い縦ハケ目、口縁部内外に横なで、体部内面下半に丁寧ななで、内外面に赤色顔料を塗布する。12は甕。口径12.0～13.3cmでひずみが大きく、器高12.8cm。にぶい黄色を呈す。粘土塊から作り出して表面を削り落とし、全体として手捏成型で、指抑え痕が顕著である。底部外面に下敷きらしき痕跡が残る。一部に粗い縦ハケ目がある。13は壺の胴部。復元胴部径25.2cm、にぶい褐色を呈し、胴部内面のうち２条の突帯の貼り付け部には指抑え痕、それ以外には工具痕が残る。外面は縦ハケ目を基調とする。14・19～22は袋状口縁の壺。14はにぶい黄橙色、19は橙色、20は灰褐色、21

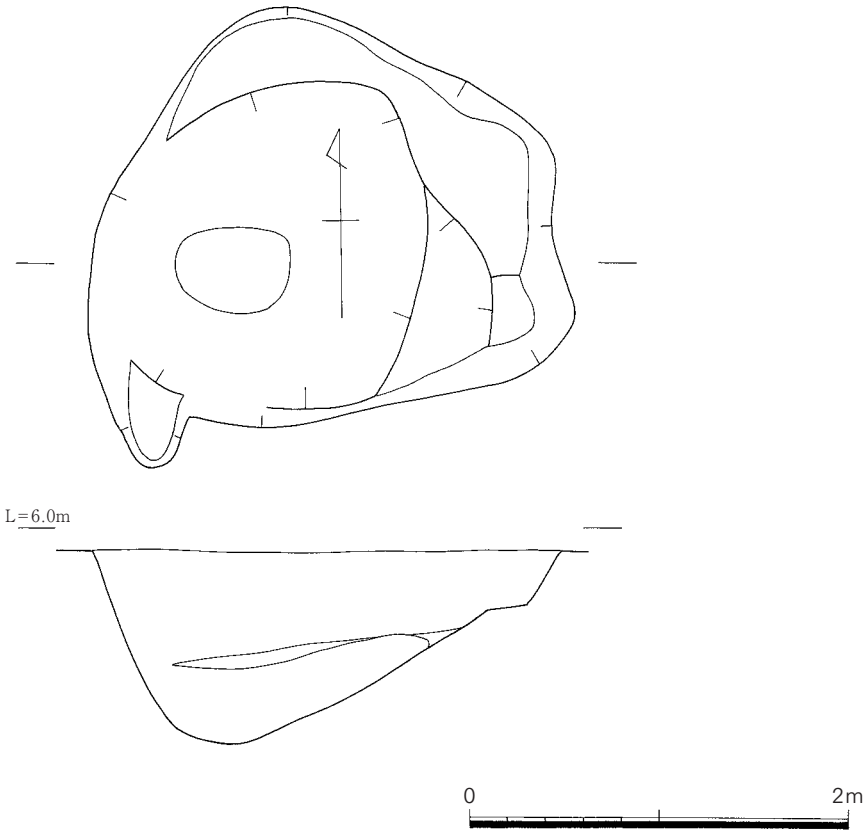


図９　ＳＫ03実測図（Ｓ＝１／40）

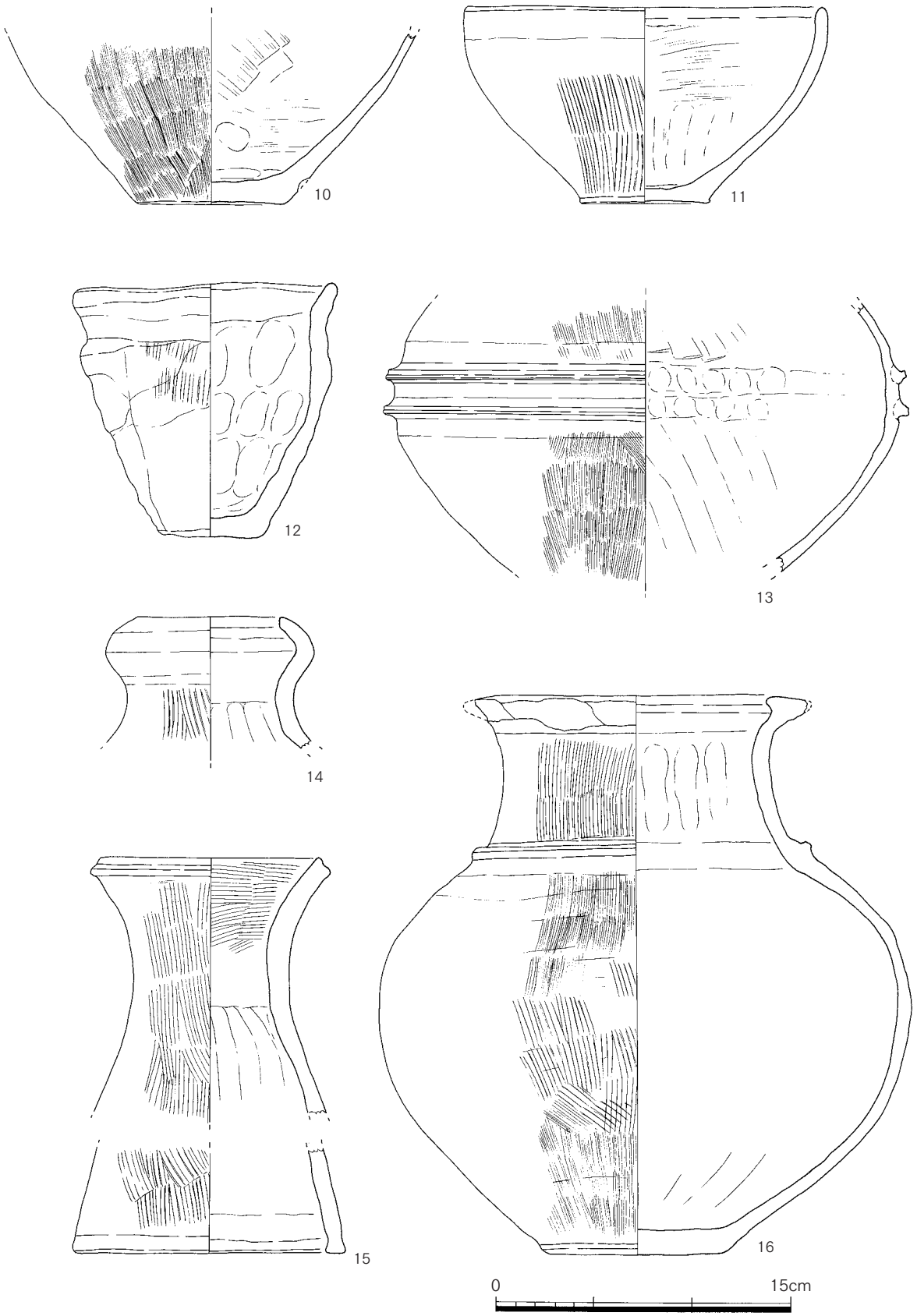


図10　ＳＫ03上層出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

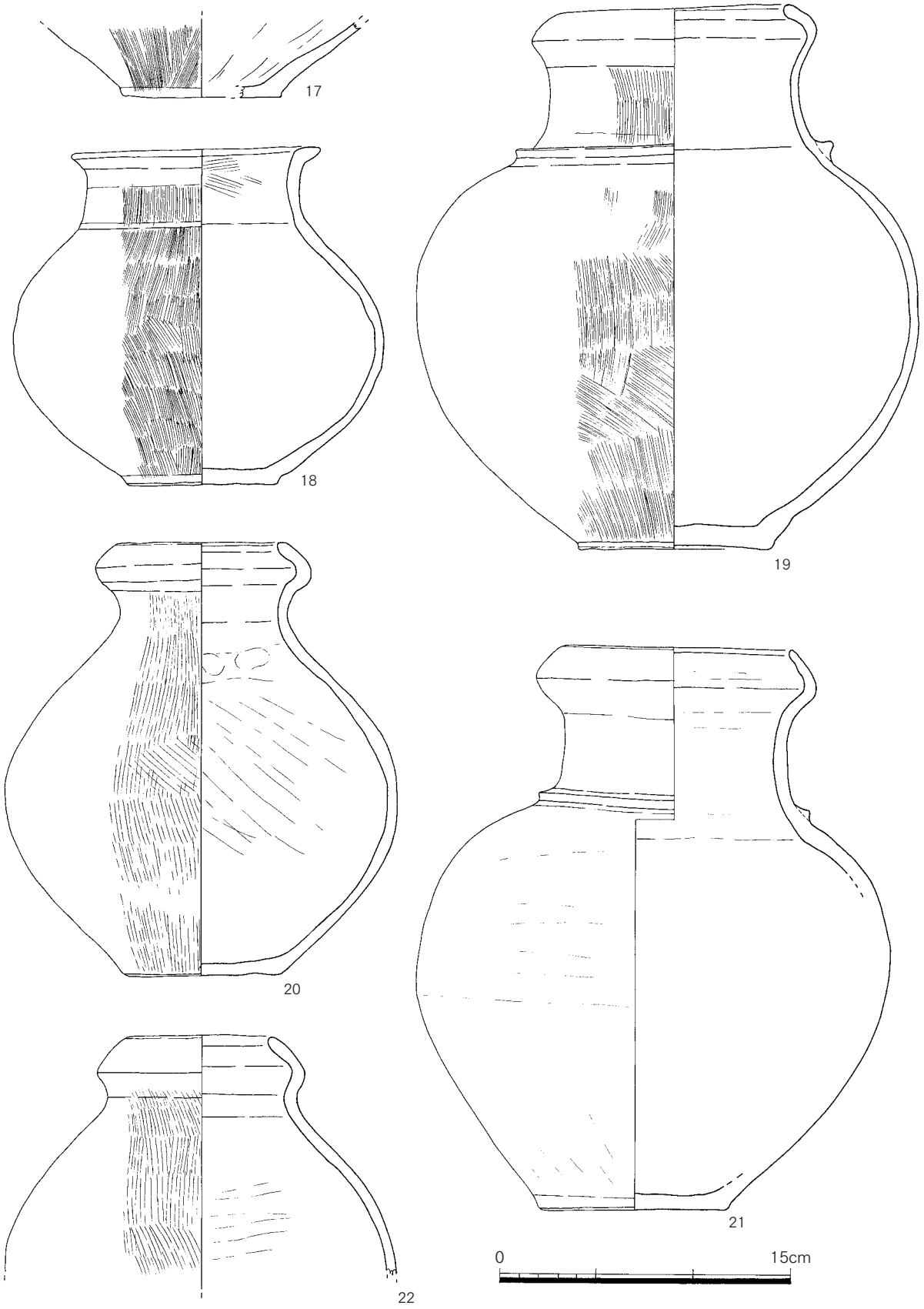


図11　ＳＫ03下層出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

は橙色で体部外面上半に赤色顔料を塗布、22は灰黄色を呈す。15は器台。にぶい橙色を呈し、外面と内面上端にはハケ目、内面下半はなでを施す。16・18は壺。16は器高28.3cm、口縁部内径14cm、にぶい橙色を呈す。鋤先状口縁で端部に打ち欠きが見られる。18は器高17.3cm、口径12.7cm、浅黄色を呈し、外面に細密な縦ハケ目を施す。

出土層位は10～16が上層、17～22が下層で、特に20～22は最下層の一括出土である。

ピット出土遺物（図12、図版７）

23～28は土師器。23は丸底椀。口径10.4～10.6cm、器高2.5～2.9cm。橙色を呈し、外面に指抑え、内面に丁寧ななでを施す。型作りか。24は壺の口縁部。にぶい橙色を呈す。25は甕の胴部。にぶい黄橙色を呈し、外面に細密な横ハケ目を施す。26は高杯の脚部。復元底径16.4cm、橙色を呈す。27は布留式の甕。復元口径18.6cm、残存高17.4cm、にぶい黄橙色を呈し、体部外面はハケ目、内面はヘラ削りを施す。28は高杯または器台の脚部。橙色を呈し、細かいなでを施す。

23～27はＳＰ14、28はＳＰ15出土。

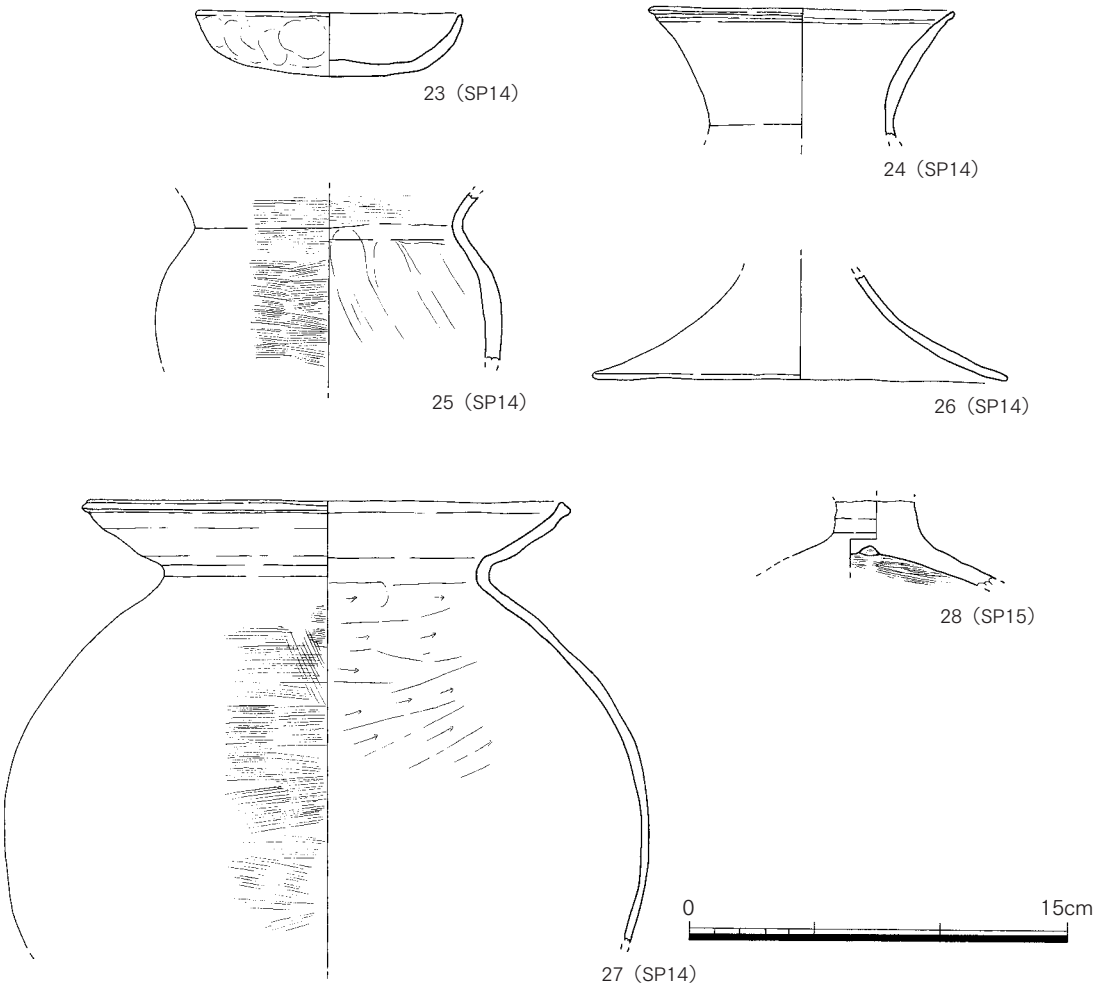


図12　ピット出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

３　まとめ

今回の調査では弥生時代後期～中世の遺構を検出した。時期別に概観し、まとめとしたい。

検出遺構の中で最も古いものはＳＫ03である。完形の甕・壺が出土しており、その形態から弥生時代後期前半、中でも初頭に近い時期に位置づけられる。上層より土器がまとまって出土し、底部では完形の壺が横たわった状態で出土している。湧水層まで深く掘り込まれていなかったことから、土坑として報告したが、以上のような遺物の出土状況は、祭祀遺物として完形の土器群を埋置する同時代の井戸と共通している。

周辺における同時期の関連遺構としては、次のようなものがある。

調査区北西側直近の９次調査では、南半で南西から北東に延びる現存長47m・幅1.4～2.1mの２号溝、北西側で南から北東に延びる４号溝下層から弥生時代後期前半の土器がまとまって出土しており、溝祭祀の様相を呈している。

９次調査地点の北東に位置する25次調査では、ＳＫ012から弥生時代後期初頭の土器がまとまって出土している。

ただこれらと同時期の居住遺構は見つかっておらず、集落の縁辺部のようである。

時代が下る遺構としては、調査区東端で検出した南北溝ＳＤ01、これに合流するＳＤ02・12・05がある。ＳＤ01はまっすぐ北側の22次調査地点へ向かっており、延長すると同調査地点で検出した中世後期の溝ＳＤ002につながりそうな位置にある。ただＳＤ01は出土遺物から中世後期まで時期が下らないとみられること、22次ＳＤ002は北へ直角に曲がり、南側に延長とみられる溝が検出されていないことから、関連ないものと考えられる。

他にＳＤ002に切られる溝として、現在の磁北方向に直線的に延びるＳＤ011が報告されている。覆土や出土遺物の内容から比較すると、ＳＤ01は22次ＳＤ011とつながる可能性が高い。22次ＳＤ011は古代末～中世初頭と推定されている。本調査のＳＤ01とＳＤ02・12は明瞭な切り合いが認められず、ＳＤ02・12から12世紀代の同安系青磁椀片が出土していることと矛盾しない。この場合総延長70m以上に及ぶ。ＳＤ05もＳＤ02・12と同様ＳＤ01に取り付く支線の溝とみられる。

本調査地点では、ピットも少なく建物をなさず、方形の区画域の外に当たるため、全体として遺構密度は低い。

以上遺構・遺物量は比較して少ないが、ＳＫ03の出土土器群は弥生時代後期前半の資料として一括性があり、遺構の時代認定の基準となる土器編年の検討に当たっても良い資料を得ることができた。中世後期の方形居館域を遡る古代末～中世初頭の遺構分布状況も気にかかるところである。今後周辺域での同時期の遺構の検出が期待される。

１区　全景（北西から）

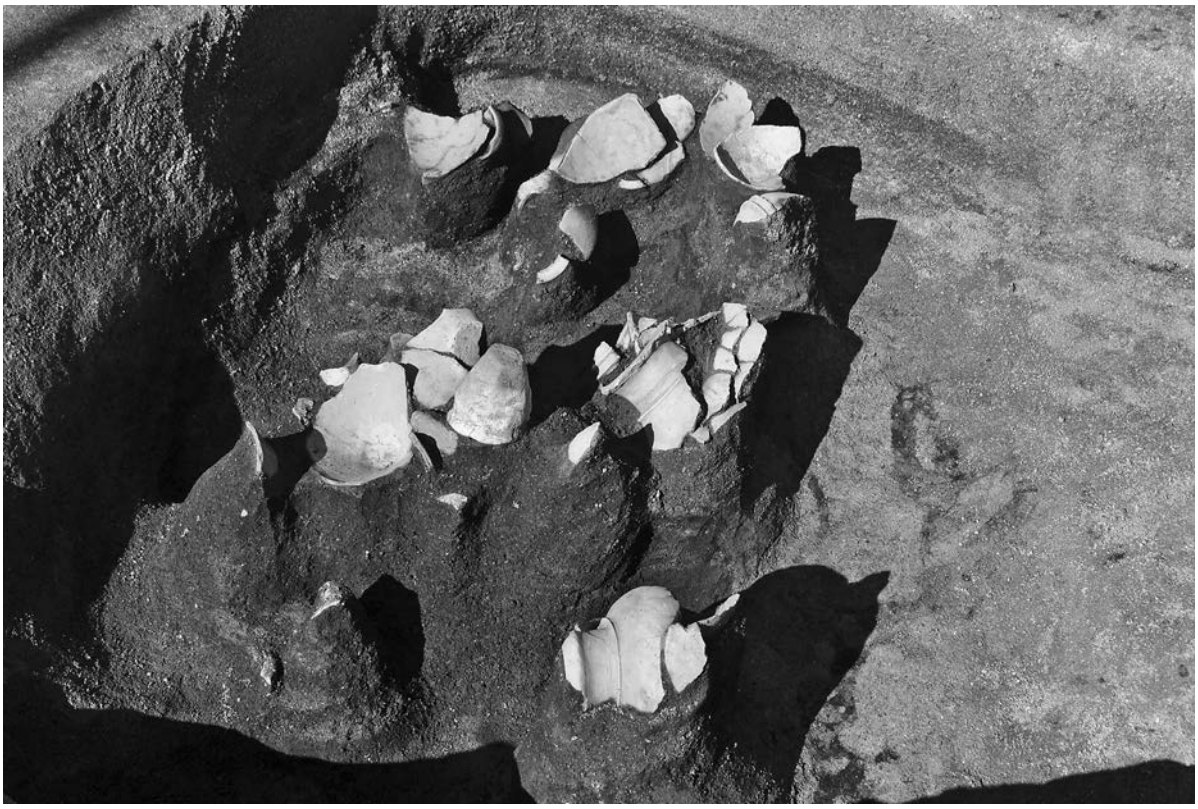
ＳＤ01（南から）

図版２

ＳＤ02・04（東から）

ＳＤ05（南西から）

ＳＫ03上層遺物出土状況（南東から）



ＳＫ03上層遺物出土状況近景（南から）

図版４

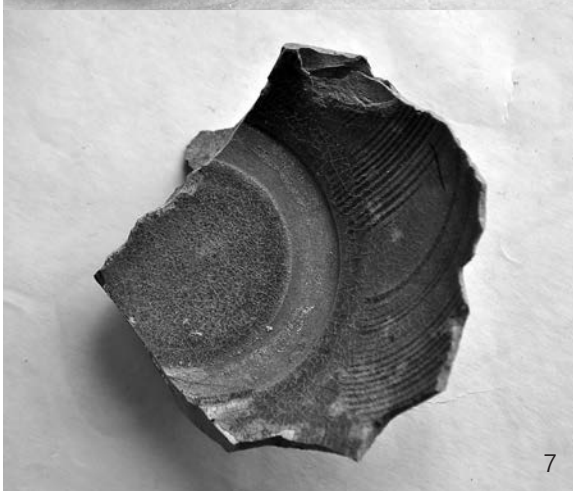
ＳＫ03（南西から）

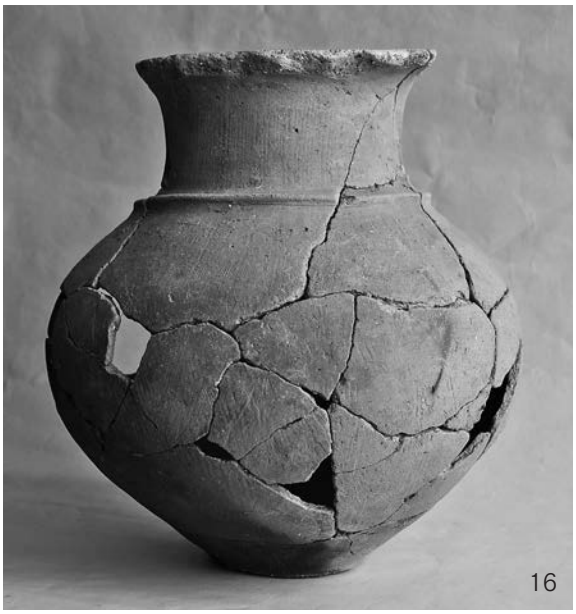
ＳＫ03最下層遺物出土状況近景（西から）

２区　全景（東から）

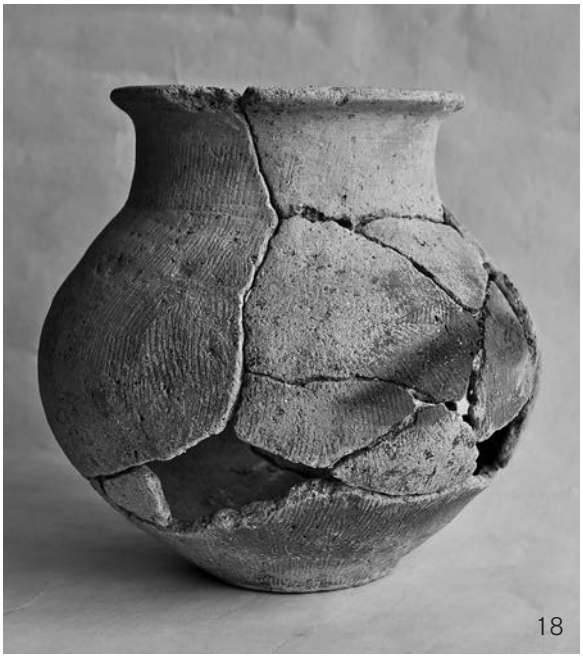
ＳＤ12（南西から）

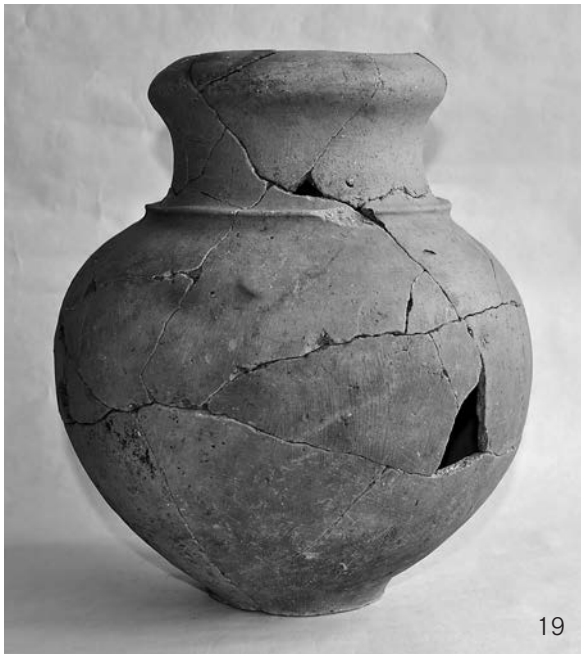
図版６

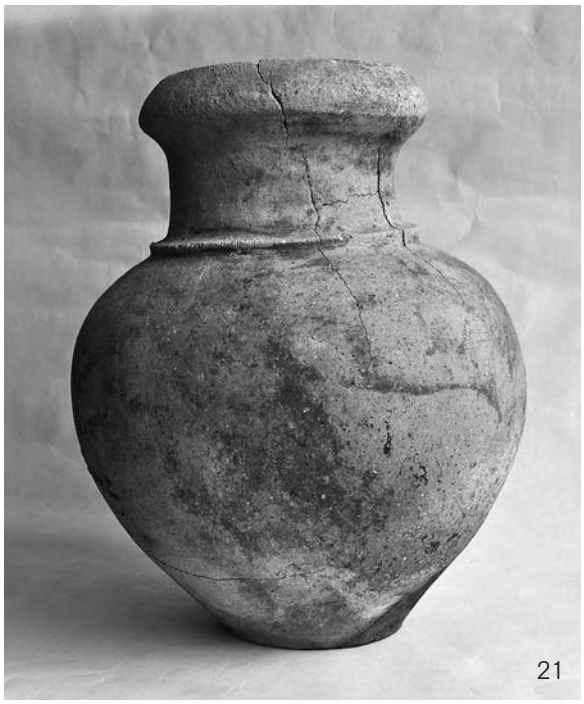




出土遺物１







出土遺物２

報告書抄録

ふりがな	はらいせき
書名	原遺跡24
副書名	第38次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1519集
編著者名	木下博文
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神１－８－１
発行年月日	2024年３月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
原遺跡 第38次	福岡市早良区原 ８丁目1162-1･2･3	40137	0311	33度 33分 42.91秒	130度 20分 25.39秒	20211018 ～ 20211201	396.6	記録 保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原遺跡	集落跡	弥生～中世	溝、土坑、ピット	弥生土器、土師器、須恵器、中国産磁器	

要約

原遺跡は早良平野の中央、金屑川右岸の微高地上に展開する。今回の調査地点は、遺跡の南西端に位置し、中世後期の居館を囲む大溝を検出した９次・22次調査地点の南側隣接地に当たる。現地表面の標高は6.5～6.7mである。遺構は現地表面下70～80cmの黄褐色シルトの上面で検出した。標高5.8～5.9mである。弥生時代後期前半の土坑、中世の溝、ピットを検出した。出土遺物は土坑から弥生時代後期前半の完形の壺・甕、溝から12世紀の同安窯系青磁椀など、コンテナ６箱分が出土している。

原遺跡24

－第38次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1519集

2024（令和６）年３月22日

発　行　福岡市教育委員会
〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1

印　刷　魚住印刷
〒812-0033 福岡市博多区大博町8-20